

ロームシアター京都 レパトリーノ創造 松田正隆 海辺の町 二部作

2023年  
2月22日(水) - 26日(日)

会場  
ロームシアター京都  
ノースホール

# 文化センターの危機

— 新作 —

シーサイドタウン

— 再演 —



本日はご来場いただき、ありがとうございます。

ロームシアター京都では、2020年度に続き、劇作家・演出家の松田正隆に「レパトリーの創造」を委嘱し、再演となる「シーサイドタウン」、そして新作「文化センターの危機」、二つのレパトリー作品を「松田正隆 海辺の町 二部作」として上演いたします。

2021年1月に初演された「シーサイドタウン」は、松田にとって、自身の演出作品を約10年ぶりに京都で上演する機会となりました。松田は長く京都で演劇活動を展開した後、東京へ拠点を移しましたが、松田の演劇的な取り組みは、その後も京都の演劇人たちに影響を与えています。「シーサイドタウン」の上演は、自身が主宰するマレピトの会での実験的な取り組みを経て、さらに更新された松田の創作活動を提示することになりました。

「シーサイドタウン」は、ある九州地方の町の空き家に、そこで育った男が戻ってくるころから始まります。その町を覆う、えもいわれぬ暴力性や狂気を随所に感じさせながら、物語は展開していきます。一方で、この作品は、演劇をどのように上演するかという問いを投げかけるものでもありました。観客は、役を演じる俳優たちによって物語の中へと導かれるだけでなく、俳優たちが今立っている劇場空間とその俳優たちの存在そのものを強く意識することとなりました。

今回創作された「文化センターの危機」は、「シーサイドタウン」の続編ともいえる作品です。同じ「海辺の町」で、「シーサイドタウン」とは違う登場人物たちが、違う物語を繰り広げます。そして、その二つの物語を、同じ俳優たちが、同じ劇場空間で演じます。ぜひ二つの作品をご覧ください、二つの物語をお楽しみいただくだけでなく、演劇をどのように上演するかという問いかけにも触れていただければ幸いです。

二つの作品は、上演に向けての稽古をほぼすべて、上演場所と同じロームシアター京都のノースホールで行いました。俳優たちは「海辺の町」の住人たちを演じながら、自らもこの劇場空間の住人となっていただけです。二つの作品は、文字通り「劇場で作られた」のですが、そのことをさらに深めるために、演劇に関心を持つ若い人たちに稽古見学の機会を提供し、創作過程を記録する取り組みも行いました。創作過程の記録については、本公演期間中(2月26日)に公開の場を設けていますので、ぜひ上演と合わせてお運びください。

最後になりますが、今回の公演にご協賛くださった京都信用金庫様をはじめ、ご協力いただいたみなさまに深く感謝を申し上げます。

ロームシアター京都

「シーサイドタウン」

この国の西の果て、海辺の町。一軒の空き家に一人の男(シンジ)が住みはじめる。シンジは東京で職をなくし行き場を失い、故郷に帰ってきた。荒廃していく地方の町では凡庸なるファシズムが横行し、シンジは戸惑いながらもその流れに馴染んでゆく。相変わらず地縁・血縁のしがらみも絡みつく。日々の生活の中で「何かの兆し」は常に現れ、起こるべくして起こった事件がシンジのもとに報告される。

シンジ(帰郷した男) ————— 横田僚平  
トノヤマ(地元の男) ————— 生実 慧  
ギイチ(隣の男) ————— 鈴鹿通儀  
クルマ(隣の女) ————— 深澤しほ  
ウミ(隣の娘) ————— 大門果央  
ケンイチ(シンジの兄) ————— 田辺泰信

初演：2021年1月27日[水]–1月31日[日]  
ロームシアター京都 ノースホール

「文化センターの危機」

文化センターの職員である吉村、辻井、中野の三人は不安な日々を送っていた。来年度から運営が民間に移行するのにともない、職員が解雇されると告げられていたからだ。そんな時、中野の大学時代の友人がイベントの下見で文化センターを訪れる。週末をキャンプで過ごすために職員たちは山に行き、焚き火をする。一方、コンビニでバイトをしている高校生の里岡は美術部顧問の教師、神長から、土曜の夜に流星群が見えると教えられ、心をときめかせる。港の岸壁では、密航者を監視する男が佇んでいる。冬の海辺の地方都市、その週末、三日間のスケッチ。

吉村まりあ(文化センター職員) ————— 中川友香  
辻井ひかり(文化センター職員) ————— 深澤しほ  
里岡 泉(高校生) ————— 大門果央  
中野浩介(文化センター職員) ————— 鈴鹿通儀  
加藤 保(その東京の友人) ————— 田辺泰信  
杉田進次郎(万引きする男) ————— 横田僚平  
神長哲也(美術教師) ————— 生実 慧  
その他、町の人々

## 「シーサイドタウン」と 「文化センターの危機」について

松田正隆

海辺の町をモチーフにして演劇をつくらうとしたときに考えていたのは、この町にある特別な雰囲気やご当地感のようなものを感じさせたくないということだった。というのも、戯曲に書かれた場所と上演空間との関係はどのようなものなのかという問題を考えた場合、戯曲上の場所に上演空間が従属するのを避けたかったということがある。だから戯曲を書くときに気をつけたのは、なるべく文面に土着感がないようにすることだった。戯曲の段階で、そこが独特なニュアンスの色に染まっている必要はない。戯曲にはらまれる強度というものはモチーフとなる町の土着性にさほど関係はないだろうし、上演されてはじめてその空間に「海辺の町」はその特異なカタチを現すのだと思った。

この「場所と空間」への問題意識は、2013年から始まったマレピトの会での「長崎を上演する」「福島を上演する」という二つの上演の過程を経て生まれきたと言っていい。場所を上演する、としたときに、その上演される場所の問題は、上演空間との関わりのうちに生み出される未知なる問題となつてはじめて観客に問いかけてくるのであって、既存の長崎・福島という場所の抱える社会的な問題が戯曲に描かれてメッセージとして観客に提起されるのではない。それゆえ、俳優と観客が集う場所である劇場に、戯曲の場所を想定し、そこを想起させるような舞台は必要ない。観客が集う空間にあらかじめ用意されるべきものは何も無い。あくまでも上演空間は観客の現在でなければならない。そこに戯曲の場所と時間

を生きるかのような人物たち(俳優)が現れるのである。そこでの行為(マイム)は、それゆえ、何かとの触れ合いを取り結ぶこともなく、現在を切り裂くただの徒手空拳でしかない。その条件のもとでやっと観客の現在は、現状の知覚が危ぶまれる経験の場となるのである。今回の二つの上演もこの問題意識をもとにした演出スタイルでつくられた。

「シーサイドタウン」は再演である。2年前に上演したものとほとんど演出面の変更はない。初演時は何か不穏なものを抱えているようなお話にも思えたが、今、また上演を試みてみると不穏さというより、この世界の現状の来歴を記した折目正しい地図を展開して、部屋のちゃぶ台に広げてゆくようなことにも思える。この上演自体は少しも変わらなかったけれどあれから世の中の局面が明らかに変わった気もする。

「文化センターの危機」は新作で、中心点から延長してゆくような構成ではなく、この海辺の町のいくつもの場所が断片的なスケッチとなり、再構成されている。

映画監督のロベール・ブレッソンが「ラルジャン」をつくった後のインタビューで次のように語っていたのは大変興味深い。

「現実の諸断片、むしろそれらの関係と組み合わせこそが表現を作り出すのであって、演劇に見られるような物真似や抑揚ではありません」(彼自身によるロベール・ブレッソン インタビュー 1943-1983 法政大学出版局 p.360)

断片的なスケッチを再構成すると先述したが、演劇という表現形式においてはブレッソンが言うようにカメラで現実を断片化し、それをフィルムにつないで再構成するようなことは不可能である。

では、演劇の上演空間を断片化するにはどうすればいいのか。現前する上演空間は、編集可能な物體的なメディアではない。上演空間は現在でなければならないが、そこに別の場所と時間を生きる人物たちが別の場所と時間の振る舞いをするようになる。そのとき、彼ら彼女らは現在にありながら現在から逃れている。この分裂を生きるのが俳優の身体なのだが、その身体の位相は明らかに上演空間という現在時にある。そうではあるのだが、その身体の繰り出すマイムの動きのたびごとに現在との縁(エッジ)が生じて、別の場所・別の時間が起こっているとも言える。つまり、概ね俳優の身体は現在にあるが、そうでありながらも俳優による運動の流れ、中断、立ち止まり、歩行、ポーズ、マイムや発話の都度都度に別の場所と時間が顔を出すのである。別の場所や時間というのは戯曲に書かれたそれでもある。海辺の町の夕べの5時。あるいは正午の演説。

ブレッソンの映画に物真似や抑揚は必要ないのかもしれないが、演劇が物真似を手放すわけにはいかない。最低限の抑揚もいるのかもしれない。なぜなら、そこにあるのは観客が連れてくる現在だからだ。その現在を相手にして海辺の町を模倣しなければならないし、そのマイムの動きこそがその場を断片化し再構成するのである。



松田 正隆 | まつだ まさたか

劇作家・演出家・マレピトの会代表。

1962年、長崎県生まれ。96年『海と日傘』で岸田國士戯曲賞、97年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、99年『夏の砂の上』で読売文学賞を受賞。2003年「マレピトの会」を結成。主な作品にフェスティバル・トーキョー 2018 参加作品『福島を上演する』など。2012年より立教大学現代心理学部映像身体学科教授。2021年1月「シーサイドタウン」をロームシアター京都で初演し、10年ぶりに自身の演出作品を京都で上演する。また、ロームシアター京都「劇場の学校プロジェクト」では、2019年度から2021年度まで講師を務めた。

### 関連記事

(ロームシアター京都WEBマガジン「Spin-Off」掲載)

海辺の町 二部作 松田正隆インタビュー  
[https://rohmtheatreyokoto.jp/archives/interview\\_matsuda\\_2022/](https://rohmtheatreyokoto.jp/archives/interview_matsuda_2022/)



関連コラム「シーサイドタウン」に住むこと  
文：松田正隆  
<https://rohmtheatreyokoto.jp/archives/living-sea-side-town/>



## 稽古場を記録すること

福井裕孝

二年前の『シーサイドタウン』から引き続き演出助手として参加している傍ら、今回はレパートリーの創造のアーカイブとして『シーサイドタウン』と『文化センターの危機』両作の稽古場の記録を取っている。話を受けた時点で記録の仕方についてはまだ何も決まっていなかったもので、とりえず稽古中に俳優と演出である松田さんとの間で交わされる会話ないしやりとりをその場ですべて書き留めていくことから始めた。基本録音や録画はせず、目の前でおこなわれている稽古の様子を肉眼で追いながら、その場で見聞きした「全部」をGoogleドキュメントに書き起こしていく。もちろんそこには記述する私の「まなざし」が含まれていて、多くの取りこぼしや取り違えがあるし、厳密な全部ではない「全部」である。だから創作の過程をわかりやすく体系的に整理した記録(ログ)というより、もっと網羅的で雑多な私記(ブログ)といった方が感覚的に近い気もする。これが劇場にアーカイブされるのに適した様式なのかはわからない。ただ何にせよ、あらかじめ記録すべきものとそうでないものとに分別せず、カメラやボイスレコーダーではなく演出助手という立場で稽古場の内側にいる「私」が今ここで見聞きしたものとをなるべく多く記述、描写していくことでしか、稽古場という状況は記録し得ないように思えた。これまでの期間、演出助手の仕事と並行しながら(ワンオペで)日々記録を続け、現在(2月上旬時点)ドキュメント上には計23日間、約12万字の記録が保存されている。

稽古の進め方は二年前と変わっていない。まず戯曲をもとに人の動きと空間の配置を決めていき、最後

までいったら全体の流れで通して見る。あとは日々「通し」を繰り返す。変わったところと言えば、一日の最後、稽古や「通し」の後に設けられるミーティングの時間が長くて丁寧になったぐらい。新作の『文化センターの危機』は昨年の夏から稽古が始まって、4日目にはもう「通し」をした。この方法で記録を取り始めたのは、その最初の「通し」の日から一日休みを挟んだ、2022年8月25日の稽古からである。

松田 えーっとですね。(中野の)入りを先にしましょう。「ああそうだったかな」で、何秒で、ここも秒ですか？

深澤 5です。

松田 5で入ってもらえますか。

鈴鹿 言い終わり5秒ですか？

松田 セリフ終わりで入ってきてみて。それで探ってみます。

…

松田 (中野の)「キャンプ行きましょうよ」から(里岡は)5秒で入ってきて、放課後というか、をやってください。

松田 入りを、次の人の入りを先行させていきますね。

(2022年8月25日)

例えばこのようなやりとりがある。先日の「通し」を踏まえて俳優の出ハケの順序やタイミングを調整している場面。松田さんが間を指示するときは大体「5秒」か「10秒」か「良きとき」のいずれか。たまに「20秒」もある。

——里岡、妹と話す場面。

松田 えっとね。

「あ、ごめん」と「あ、そうだ」の「あ」二つ。

後半の「あ、そうだ」の

「あ」を大きくして欲しいんだけど、

一回目の「あ」も大きくしてほしい。

で、なおのこと大きいのが、

後の「あ、そうだ」の「あ」。

里岡 「あ、ごめん」

松田 うん、もうちょい(大きく)。

大門 ああ。

大門 「あ」。

松田 うん、それぐらい。

(2022年12月28日)

あるいはこのようなやりとりがある。「あ」というセリフを大きく言ってほしいという演出とそれに対する俳優の応答。なぜ「あ」を大きく言うのか。なぜ間は「5秒」がいいのか。演出的な意図や背景についてその場で一々言及されるわけではなく、これまでの経験則から俳優と松田さんとの間でなんとなく了解されて「では次」と進んでいくので、このように見聞きしたことを素直に文字に起こすだけ(必要に応じて括弧書きやコメントにて補足を付記することもあるが)では、今ここで何が問題にされているのかがわかりにくい。しかしこの記録の上で重要なのは、あくまで「あ」を大きく言うことのために今ここでどのような



演出的な言語が用いられ、どういった対話が交わされたのかであり、その事態の成り行きをあるがままに書き留めた冗長な記述は、「あ」を大きく言うことの演出的な意図や根拠を説明するために記されているのではない。

松田さんは11月の稽古にて、一つのリアリティに物事を集約させていくような「統合」ではなく、異なるそれぞれの視点や見ている世界を共存させたまま描くような「総合」によって演劇を立ち上げると説明している。いわばこの記録も「総合」的な記録である。たとえ矛盾した内容であっても、無味乾燥した退屈なやりとりであっても、その場その場で意識的/無意識的に選ばれ発された具体的な言葉を尊重すること。この記録に閉じ込めた“生きた”言葉の集積が時代を超えて読む者に何かを物語ることを願っている。

福井 裕孝 | ふくい ひろたか

1996年京都生まれ。演出家。2017年にマレピトの会『福島を上演する』に演出部として参加。2018年から個人名義での作品の発表を始める。近作に『インテリア』(2020)、『デスクトップシアター』(2021)、『シアターマテリアル』(2020, 2022)など。下北ウェーブ2019選出。ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム“KIPPU”選出。2022年度よりTHEATRE E9 KYOTOアソシエイトアーティスト。

※稽古場記録の詳細は、p10をご覧ください。



# 出演者



田辺 泰信 | たなべ やすのぶ

1997年-2001年劇団維新派に所属。国内及び海外公演に参加した後、作業療法士免許取得のため活動休止。2013年頃より映像分野を中心に活動を再開。主な出演作は濱口竜介監督「ハッピーアワー」、いまおかしんじ監督「れいこいるか」、野原位監督「三度目の、正直」、NHK土曜ドラマ「心の傷を癒すということ」、今年1月放送の「探偵ロマンス」がある。近年の舞台参加は第19回AAF戯曲賞公演「ねー」、akakilike「捌く-Sabaku」(東京芸術祭2022)など。



鈴鹿 通儀 | すずか みちよし

中学高校時代に日本ハムファイターズの私設応援団員として全国の球場を飛び回るなどしていたら、大学受験に失敗。2年間に渡るブー太郎生活を過ごしたのち日本大学芸術学部演劇学科に進学。卒業後活動を本格化し、中野成樹+フランケンズ、ままごと、劇団子供鉦人、ピンク・リパティ、財団、江本純子、スペースノットブランクなど舞台を中心に出演。3月にサンプル・松井周の標本室『標本の湯』(元映画館)《監修》、4月にゆうめい『ハートランド』(東京芸術劇場 シアターイースト)《出演》を控える。



中川 友香 | なかがわ ゆか

1999年、松本生まれ。俳優。主な出演作に、関田育子「浜梨」、新聞家「弁え」、オル太「ニッポン・イデオロギー(仮)」、篠崎誠監督『きみの面影をいまだ夢みる』『ひかりのなかでよむ』。2022年、俳優2人組のユニット「再演企画」を始動し「ここから発つ」を上演。



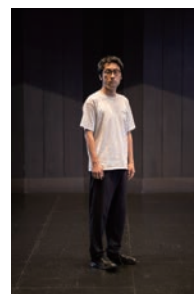
深澤 しほ | ふかさわ しほ

演劇カンパニーヌトミックにて、俳優・スタッフとして活動。近年の主な舞台出演作に、福名理穂作・演出『柔らかに揺れる』(第66回岸田國士戯曲賞受賞)、映画出演作に、杉田協士監督作『春原さんのうた』(第32回マルセイユ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門にてグランプリ他多数受賞)などがある。



生実 慧 | いくざね さとし

1986年、石川県生まれ。近年、出演・参加した作品に、マレピトの会『福島を上演する』(2016-2018)、ワワフラミンゴ『くも行き』(2019)、ダダルズ『QPQの地点』(2022)などがある。



横田 僚平 | よこたり りょうへい

オフィスマウンテンのメンバー(主宰 山縣太一)、2016年「ドッグマンノーライフ」で初参加、数年後入る。他に犬飼勝哉、円盤に乗る派、グループ野原、サンプル、七里圭、新聞家、ダダルズ、玉城大祐、ロランコロンの作品に参加。今年6-7月にこまばアゴラ劇場でオフィスマウンテン「ホールドミーおよしお」に出演。



大門 果央 | だいもん かほ

京都府出身、大学生。シーサイドタウンが初出演作です。2回目ですが頑張ります。

## レパトリーの創造について

ロームシアター京都が、2017年度から取り組んでいるプログラムで、劇場のレパトリー演目として時代を超えて未永く上演されることを念頭に、公立劇場として主体的に作品製作に取り組む事業です。また、作品創造のプロセスを通じて、俳優、ドラマトゥルク、制作者等の専門家人材の育成や観客育成のための関連プログラムを企画し、レパトリーの創造から各地域における劇場文化をつくることを目指します。

これまでに、計6作品を製作しました。今回上演する「文化センターの危機」と「シーサイドタウン」以外の4作品は、以下の通りです。

### 木ノ下歌舞伎『心中天の網島—2017リクリエーション版—』

作：近松門左衛門  
監修・補綴：木ノ下裕一  
演出・作詞・音楽：糸井幸之介 (FUKAIPRODUCE 羽衣)  
初演：2017年10月5日[木]—10月9日[月] ロームシアター京都 ノースホール

### 木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』

作：菅専助、若竹笛躬  
監修・補綴・上演台本：木ノ下裕一  
上演台本・演出・音楽：糸井幸之介 (FUKAIPRODUCE 羽衣)  
初演：2019年2月10日[日]—2月11日[月・祝] ロームシアター京都 サウスホール  
再演：  
2019年2月15日[金]—16日[土] 穂の国とよはし芸術劇場PLAT  
2019年3月14日[木]—17日[日] KAAT 神奈川芸術劇場  
2020年10月22日[木]—26日[月] あうるすぽっと (豊島区立舞台芸術交流センター)  
2020年11月2日[月]—3日[火・祝] ロームシアター京都 サウスホール  
2023年5月から7月にかけて、全国5ヶ所で上演を予定

### ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー=レイ『ショールームダミーズ #4』

演出・振付・舞台美術：ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー=レイ  
初演：2020年2月8日[土]—2月9日[日] ロームシアター京都 サウスホール  
再演：2021年11月11日[木]—11月14日[日]  
ボンビドゥー・センター (フランス・パリ) / フェスティバル・ドートンヌ 2021

### 市原佐都子 / Q 『妖精の問題 デラックス』

作・演出：市原佐都子 (Q)  
初演：2022年1月21日[金]—1月24日[月] ロームシアター京都 ノースホール  
再演：  
2022年2月20日[日]—2月23日[水・祝]  
リーブラホール (港区立男女平等参画センター内) / シアターコモンズ '22  
2022年7月2日[土]—7月3日[日] 久留米シティプラザ Cボックス

©ロームシアター京都レパトリー作品サイト  
<https://rohmtheatreyoto.jp/repertory/>

## アーカイヴについて

レパトリーの創造では、創作過程をいかに記録するかというアーカイヴの視点を持ちながら作品製作に取り組んでおり、作品ごとに異なる方法で記録を残しています。

「松田正隆 海辺の町 二部作」として「シーサイドタウン」の再演と新作「文化センターの危機」の上演に向かう過程では、両作品で演出助手を務める演出家の福井裕孝が、自身の視点も織り交ぜながら、稽古場での日々の記録を書き留めています。

以下よりご覧ください。

・第一期：2022年8月20日—9月2日  
[https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report\\_matsuda\\_2022keikoba/](https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report_matsuda_2022keikoba/)



・第二期：2022年11月1日—3日  
[https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report\\_matsuda\\_2022keikoba\\_2/](https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report_matsuda_2022keikoba_2/)



・第三期：2022年12月25日—29日  
[https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report\\_matsuda\\_2022keikoba\\_3/](https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report_matsuda_2022keikoba_3/)



・第四期：2023年1月7日—9日  
・第五期：2023年1月21日—23日  
[https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report\\_matsuda\\_2022keikoba\\_4and5/](https://rohmtheatreyoto.jp/archives/report_matsuda_2022keikoba_4and5/)



※公演後に第六期 (2023年2月16日—21日) を掲載予定。

また、2020年度の「シーサイドタウン」初演の稽古場の様子を撮影した記録映像 (ディレクション：村川拓也、撮影：米倉伸) の上映とトークを、本公演期間内に実施します。

2月26日[日] 13:00  
トーク登壇：村川拓也、福井裕孝

# ロームシアター京都 レパトリーの創造 文化センターの危機 — 新作 — シーサイドタウン — 再演 — 松田正隆 海辺の町 二部作

作・演出=松田正隆

出演=生実 慧、鈴鹿通儀、大門果央、田辺泰信、  
中川友香 (「文化センターの危機」のみ)、  
深澤しほ、横田僚平

照明=藤原康弘、杉本奈月 (N2 / 青年団)  
音響=合田洋祐 (ロームシアター京都)  
演出助手・稽古場記録=福井裕孝  
舞台監督=川村剛史 (ロームシアター京都)

イラストレーション=カナイフユキ  
宣伝美術=南 琢也  
写真撮影=中谷利明  
記録映像撮影=嶋田好孝、吉見 峻、吉田 涼

制作=齋藤 啓・木原里佳 (以上、ロームシアター京都)

[ロームシアター京都スタッフ]  
照明=苗木絵菜

広報=松本花音、山形ゆき  
票券=日浦由美子  
プログラムディレクター=小倉由佳子

企画製作=ロームシアター京都  
主催=ロームシアター京都 (公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、  
京都市  
協賛=京都信用金庫  
令和4年度文化資源活用推進事業  
後援=京都新聞



2023年2月22日[水]—26日[日]  
22日[水] 19:00 「文化センターの危機」  
23日[木] 14:00 「文化センターの危機」 / 18:30 「シーサイドタウン」  
24日[金] 19:00 「シーサイドタウン」  
25日[土] 14:00 「シーサイドタウン」 / 18:30 「文化センターの危機」  
26日[日] 16:00 「文化センターの危機」

ロームシアター京都 ノースホール  
(京都市左京区岡崎最勝寺町13 TEL 075-771-6051)



Photo: Toshiaki Nakatani

**ロームシアター京都**  
ROHM Theatre Kyoto